

鬼石中だより



自立・貢献

藤岡市立鬼石中学校
令和7年度学校だより 第11号
令和7年12月23日
文責：校長 五十嵐

* 2学期も大変お世話になりました *

2学期も今日で終わりを迎えます。保護者の皆様には、PTA活動へのご協力、そして日頃からのご理解とご支援に心から感謝申し上げます。皆様の温かい励ましが、生徒たちの学習意欲を高め、学校全体の活性化につながっています。生徒たちは、保護者の皆様の期待に応えようと、日々努力を重ねています。3学期も、生徒たちの更なる成長に向けて、教職員一同力を合わせてまいりますので、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。新年が皆様にとって幸せな良き年となりますように！

* 後期人権集中学習 12/2～12 *

12月2日から12日までの2週間、後期人権集中学習を実施し、人権について考える様々な活動に取り組みました。集中学習を実施するにあたって、初日に以下のような校長の人権講話を行いました。

「気づく人で満たす鬼中」（12月朝礼＝後期人権集中学習校長講話より）

「気づく」という行為は、人権問題を自分ごととして捉え、より良い社会を築くための第一歩として位置づけられています。多くの人権啓発活動で、「“気づく”ことからはじめよう」と呼びかけているのは、そのためです。

では、「気づく」とは具体的にどういうことでしょうか。それは、皆さんの周りにいる誰かの「つらさ」や「不公平」に、「目を向ける」ということです。

例えば、皆さんのクラスや部活動での日常を考えてみてください。

①「その言葉、本当に大丈夫？」と立ち止まる気づき

友達が、誰かの外見や性格のことで、からかいや悪口を言っているのを聞いたとき。「ちょっと言いすぎじゃないかな」「相手は傷ついているんじゃないかな」と、違和感を覚えること。これが、最初の「気づき」です。

→【行動例】勇気を出して「そういう言い方、やめようよ」と優しく声をかける。あるいは、先生に相談する。

②「無関心」という壁を破る気づき

誰かが孤立している、話しかけられずに一人でいる。それを「自分には関係ない」と見過ごすのではなく、「何かできることはないかな」と心を動かすこと。いじめの現場で、見て見ぬふりをする「傍観者」でいるのではなく、「何かがおかしい」と気づくことです。

→【行動例】勇気を出して隣に座って話しかけてみる。または、安心できる大人に状況を伝える。

これらの「気づき」は、決して特別なことではありません。日々の生活の中で、友達や家族、社会に対して、「思いやり」という心のアンテナを張ることから始まります。「人権問題」なんて言われると、難しくて遠い話のように聞こえるかもしれませんが、そうではありません。それは、皆さんの言葉遣い、行動、そして「無関心でいること」の中に潜んでいるのです。

この講話を聞いて、「自分は誰かを傷つける言葉を使っていないか?」、「誰かの不公平を見過ごしていないか?」と、たった一度でも立ち止まって考えてくれたなら、それはもう大きな一歩です。皆さんの「気づき」が、この鬼石中学校を、誰もが安心して自分らしく過ごせる、より優しい場所へと変えていく力になります。

皆さん、「気づく人」になろう。そして、その気づきを、偏見や無関心をなくす心のバリアフリーを築く第一歩につなげよう。そして、そんな「気づく人」で鬼石中を満たそう。

期間中に高めた人権意識を今後も継続し、日常にある様々な問題や違和感に気づける人になってほしい、そしてその気づきを、偏見や無関心をなくす心のバリアフリーを築く第一歩につなげてほしいと思います。

＊ 2学期校長講話のまとめ ＊

2学期も生徒たちの成長を願い、中学校生活の中で意識してほしいことを「十文字(タイトルの)講話」として伝えてきました。生徒たちも校長の話をしっかり聞いて、一人一人が大切にしたい言葉を持ち、自分自身の成長に繋げようとしています。先日実施した高校入試に向けた3年生の面接練習では、印象に残った講話とそれをどのように自分自身の成長に繋げたのか質問したところ、面接練習に臨んだ全ての3年生がしっかりと自分の考えを校長に伝えることができました。各講話の要点をここにまとめましたのでご覧ください、各家庭でもぜひ話題にしてください。



「達成するまで継続する」(7月1学期終業式)

宮本武蔵の五輪書に「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす」という言葉がある。千日の練習で基本的な技が身につく、万日の練習でその技が磨かれて名人の域に達するという。長く苦しい練習に耐え、繰り返し積み上げる努力なしには物事は為しえない。つまり、新しいことができるようになるには、かなりの日数と練習が必要であり、掲げた目標を達成するまで継続あるのみ!

「決断したらできるまで」(8月2学期始業式)

いったん「やる」と決めたことは、できるまでやめてはいけない。一か月でできないならば、二か月かけてやればよい。二か月でできなければ、百日かけてやればよい。いつまでたってもできなければ、できるまでやるのだ。決して途中であきらめてはいけない。この考え方は、「必ずやり遂げる強い意志」と「最後まで諦めない執念」を兼ね備えた、目標達成のための行動指針と言える。

「気が利く人は気づく人」(9月朝礼)

気が利く人には3つの力がある。気が利く人は、まず観察力が高い「気がつく人」である。視野が広く全体が見えているので、総合的に判断して動ける。さらに相手の立場に立って考えられる想像力があるので、自己満足なおせっかいにならず、適切な行動をとれる。そして、気づいたことをさっと行動に移すことができる行動力も持ち合わせている。こういう人たちが集まる学級はお互いを思いやり、協力し合う文化が集団に根付く。

「上士の道を歩むために」(10月朝礼)

人の話に素直に耳を傾けて実行に移していける謙虚な人(上士)には運命の女神がほほえんでくれる。逆に、聞く耳をもたない人(下士)は、何にも反応できず、何も変わらない。謙虚な心は、弱さではなく、むしろ学び成長しようとする意欲や、他者への感謝の気持ちの表れである。謙虚さは、自己の未熟さを認め、常に向上心を持って学び続ける姿勢を意味している。

「脱皮しない蛇は滅びる」(11月朝礼)

「脱皮しない蛇は滅びる」という言葉があるように、私たちも「これで十分だ」と立ち止まってははいけない。常に「もっと良い方法があるのではないか」、「もっと新しい考え方があるのではないか」と問いかけ、自らを成長(脱皮)させ続けなければならない。慣れたやり方や楽な考え方にしがみつくとではなく常に新しい皮をまとった蛇のように、変化(脱皮)し続ける勇氣を持ってほしい。

「気づく人で満たす鬼中」(12月朝礼=後期人権集中学習校長講話)

※表面をご覧ください。